様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３８０２５５

研究課題名（和文）ジェームズ・ステュアートの貨幣的経済理論成立過程の研究

研究課題名（英文）Study on how James Steuart Elaborated his Monetary Theory

研究代表者
古谷　豊（Furuya, Yutaka）

東北大学・経済学研究科・准教授

研究者番号：００３７４８８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：ジェームズ・ステュアートはアダム・スミスやデヴィッド・ヒュームらとともに，18世紀の後半に経済学が成立するうえで重要な役割を果たした学者であった。本研究ではそのなかでのステュアートの役割の重要性を，貨幣的経済理論を打ち立てた点にあるととらえて，草稿資料をもとに，ステュアートが彼に先行する様々な学説をどのように学んで，吸収することで，彼の貨幣的経済理論を形成していったのかについて，明らかにしていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アダム・スミスの時期に経済学が成立したということは，それ以前の学説や思想から，ある一つの経済学へと収れんしたのだ，ということを意味するのではない。むしろ，経済学は本質的に多様性を内包する形で，複数の理論化の併存という形で成立したのだった。この研究は，スミスの『国富論』ではどちらかというと覆い隠されている側面であるところの，経済における貨幣や貨幣の統治に軸を置いた理論化の過程を明らかにするものである。

研究成果の概要（英文）：James Steuart was a scholar who, along with Adam Smith, David Hume, and others, played a pivotal role in forming the theory of political economy in the latter half of the eighteenth century. Compared to Smith's and Hume's theory, one of the significant characteristics of Steuart's theory was that the importance of money and the management of money was at its core. This study, by examining Steuart's annotation manuscripts, reconstructed the process of how Steuart formed his monetary theory.

研究分野：経済学史・経済思想史

キーワード：経済学説　経済思想　ステュアート　貨幣論　形成史

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　高まるステュアート理論の現代的意義

ジェームズ・ステュアートは英語圏で初めて「経済学」（Political Economy）を冠した著作『経済学原理』（1767）を刊行し，アダム・スミス（『国富論』1776）とともに経済学を誕生させた。とりわけ現代ではその理論は最初の貨幣的経済理論として位置づけられ，ケインズの経済理論の先駆としても注目されている。現代（2008 年以降）の文脈でとりわけ目を引くのは，信用貨幣によるバブルとその崩壊への分析が質量ともに優れ（ジョン・ローの取り組みの分析に 13 の章があてられているなど），また国家負債の膨張の限界や国家破産についての分析も理論の重要な部分を占めている点である。経済学の歴史上，どのような叡智が提起されてきたのかを論じる際，ステュアート理論は近年さらにその重要性を増しているといえる。

(2)　申請者を中心に進められてきた草稿研究

他方でステュアート研究については長年，その草稿資料が未解読のまま残されていたことが障害となっていた。スミスにせよリカード，マルクス，ケインズにせよ，その学説研究には草稿や書簡類が研究資料として整備されることが重要な役割を果たしてきたが，ステュアートの場合は資料の所有形態などの要因からそれが遅れてきた。エディンバラ大学図書館 CRC の協力を得て，ドナルド・ラザフォード（エディンバラ大学）や故アンドリュー・スキナー（グラスゴー大学）の指導を仰ぎつつ，2004 年から系統立ってステュアートの草稿研究を進めてきたのが申請者と奥山忠信であった。

(3)　ステュアートの理論形成の過程に光を照らす草稿資料

なかでも直近の数年間に集中的に取り組んできた「経済学準備草稿」に相当する資料は，ステュアートの理論の形成過程と『経済学原理』での記述の背後の意味を豊かに描き出す，極めてインパクトの大きい資料であった。この草稿資料は，ステュアートの貨幣的経済理論がどのような理論的継承関係のもと成立していったのかを明らかにすることができる史料である。

２．研究の目的

(1)　申請者の古谷は奥山忠信、エディンバラ大学のドナルド・ラザフォード、グラスゴー大学の故アンドリュー・スキナーの協力のもと、平成 16 年度よりジェームズ・ステュアートの未発表草稿の発掘・解読作業を系統立って進めてきた。とりわけ近年，単独で取り組んできた「経済学準備草稿」の一連の草稿は，理論的にも極めてインパクトの大きいものであった。

(2)　本研究計画はこの「経済学準備草稿」を研究資料として整備してきた成果に基づいて、この草稿資料を中心に，ステュアートの貨幣的経済理論形成の背景と過程を明らかにすることを目的とする。付随してそれを英語で海外を中心に報告することにより，日本で系統だって進められてきたステュアートの草稿資料研究の意義を海外に発信する。

３．研究の方法

(1)　申請者が中心になって，2004 年から進めてきたステュアートの未公刊草稿資料を全面的に駆使して，ステュアート以前の理論からステュアートがどのように学び，自らの理論に組み入れていったのかという，これまで明らかにされてこなかった理論の継承・形成過程を明らかにする。

(2)　焦点を，貨幣的経済理論としての側面に絞り，ヒュームやスミスとは異なる軸足の理論がどのように形成されてきたのかの道筋を追う。

(3)　海外の研究コミュニティーとの交流のなかで進める。

４．研究成果

(1)　ステュアートの草稿資料のなかでも特に，1760 年前後にドイツのテュービンゲンで書かれたと推定される経済学準備草稿をもとに，『経済学原理』だけからは分からない理論・思想の継承・変形過程を跡付けようとする点が，本研究の意義でありオリジナルな点であった。この研究は途中から国際共同研究加速基金の助成も受けることができたことで，予想以上に研究が広がり，実りの多い研究となった。北米を中心とする学会 History of Economics Society ならびに米国のデューク大学の研究センターCenter for the History of Political Economy で研究のネットワークを広げることができ，そこでのつながりから，2017 年 10 月にはスペインのセヴィリアで開催されたステュアートカンファレンス James Steuart and an Economy without Invisible Hands の Scientific Committee の一員としてカンファレンス運営に参加し，さらにこのカンファレンスでの成果は共編著として今年出版される予定である（The Economic Thought of James Steuart. Chapter 11. Steuart and Davenant on Financing Wars. Routledge）。

(2)　またこの過程では，エディンバラ大学のトマス・アナートのグループとの交流関係も形成することができた。2016 年 8 月にはトマス・アナートと，チャールズ・ブラッドフォード・

バウ（ヨンセイ大学）を招いて国際カンファレンスを開催し，ステュアートの理論形成に関して，当時の宗教をめぐる議論などより広い背景から検討する機会となった。

(3)　17 世紀末葉から 18 世紀初頭に活躍した経済学者，チャールズ・ダヴナントとステュアートとの関係についての研究では，ステュアートの貨幣的経済理論の背後に存在する，戦争論と戦時財政論を浮き彫りにすることができた。ステュアートはダヴナントの An Essay on the Ways and Means of Supplying the War (1694)と，Discourse on the Public Revenues, and on the Trade of England (1698)について詳細な注釈メモを作成していて，『経済学原理』と照合しつつ読み解くことで，ステュアートが一方でダヴナントの理論を継承しつつ，他方ではステュアートはダヴナント以降の半世紀に起きた社会的な変化を明確に財政革命として認識し，そこからダヴナントとは異なる信用論を意図的に形成したのだということが，本研究で明らかにすることができた。

(4)　古代ギリシャの哲学者クセノフォンとステュアートとの関係についての研究では，これまほとんど注目されてこなかった，ステュアートと古代という研究領域を拓くことができた。時代状況や経済の発展段階は，古代ギリシャと 18 世紀後半のイギリスでは大きく異なるが，他方で基本的な骨格については共通性も多いということをステュアートが認識していたことを，研究を通して析出することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 古谷　豊，Steuart on Xenophon's Ways and Means，『研究年報　経済学』，査読有，Vol. 74，No. 2，2014，67-80

〔学会発表〕（計 12 件）

① Yutaka Furuya，Marx on Steuart ’s ‘ Money of Account ’ , 45th Annual Meetings of the History of Economics Society，2018
② Yutaka Furuya，Steuart and Davenant on Financing Wars”, Congreso Científico Sevilla/ 2017 Sir James Steuart y la Economía sin manos Invisibles，2017
③ Yutaka Furuya，James Steuart on the Ancient Economy，Center for the History of Political Economy Seminar，2017
④ Yutaka Furuya，From Land Bank Theory to Real Bills Doctrine: Construction of James Steuart ’ s Theory on Credit Money，44th Annual Meetings of the History of Economics Society，2017
⑤ Yutaka Furuya，Steuart and Davenant on Financing Wars，7th Political Economy Tokyo Seminar，2016
⑥ Yutaka Furuya，James Steuart on the Ancient Economy"，43rd Annual Meetings of the History of Economics Society，2016
⑦ Yutaka Furuya，Steuart and Davenant on Financing Wars，第 54 回経済思想研究会，2016
⑧ Yutaka Furuya，James Steuart on the Ancient Economy，経済学史学会第 79 回大会，2015
⑨ 古谷　豊，テキストマイニングを用いたスミス『国富論』普及の分析，経済学史学会関西部会第 167 回例会，2014
⑩ 古谷　豊，テキストマイニングを用いたスミス『国富論』普及の分析，第 49 回経済思想研究会，2014
⑪ Yutaka Furuya，James Steuart on the Ancient Economy，46th Annual UK History of Economic Thought Conference，2014
⑫ Yutaka Furuya，James Steuart on the Ancient Economy，第 48 回経済思想研究会，2014

〔図書〕（計 2 件）

① Yutaka Furuya　他，Routledge，*The Economic Thought of James Steuart*，2019，320（刊行予定。担当個所の最初と最後のページは未定。）
② 古谷　豊・柳澤哲哉，ステュアートの人口理論（辞書項目），『マルサス人口論事典』，2016，368（135-36）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。